

「征服されざる人々」における真の勇氣

石川和代

True Courage in *The Unvanquished*

Kazuyo ISHIKAWA

I

William Faulkner の『征服されざる人々』(*The Unvanquished*, 1938) は、7つの短編を集めた短編集で、はじめの5つは *Saturday Evening Post* に、6番目の短編は *Scribner's* に発表されたものであり、7番目の短編だけは、すでに雑誌に発表されたものではなく、この短編集が出版される時に、新たに書き加えられたものである。どの物語も語り手はベイヤード・サートリス (Bayard Sartoris) で、最初の物語で12才である彼は、最後の物語では24才の青年に成長している。この作品の時代背景は、南北戦争が始まった1年後の1862年から1874年までの12年間であり、この作品は Faulkner の描くアメリカ南部の過去へさかのぼる物語といえる。

この短編集は、今まで余り多くの批評家によってとりあげられていないが、それはすでに雑誌に発表した短編を集めて出版したものにすぎないという印象が強かったからかもしれない。だが7番目の「美女桜の香り」(“An Odor of Verbena”)が書き加えられたことによって、この短編集全体が1つのテーマのもとに統一されたと思われる。『征服されざる人々』という題名が示すように、この作品には何人もの勇氣ある人々が描かれている。その勇氣も様々であり、特に7番目の「美女桜の香り」に描かれる勇氣には心を動かされる。そこで、この作品の登場人物たちの様々な勇氣に光をあてることによって、真の勇氣というものを、この作品の中で探究してみたいと思う。

II

まず最初に勇氣ある人物と考えられるのは、語り手ベイヤードの祖母のグラニー (Granny) である。彼女はベイヤードの父のサートリス大佐 (Colonel Sartoris) の義理の母にあたる。「待伏せ」(“Ambuscade”)において、ベイヤードとリンゴ (Ringo) が北軍の馬を撃ってしまった時、北軍が二人を探しに家にやって来る場面がある。その時、彼女は二人を自分の着ているドレスのスカートの下に隠し、家に子供はいないと嘘をつき、二人を北軍の大佐から守ってやる。大佐はスカートの下の方のふくらみに気づき、じっと見てからグラニーの顔を見るが、グラニーは嘘をつきながら、大佐の眼を見返すという強い態度である。「退却」(“Retreat”)では、北軍がやって来て南部の家々が破壊されるという状況の中で、ベイヤードとリンゴを連れて、御者に黒人の召使いジョービー (Joby) を従えて、ジェファソンからメンフィスまで馬車で出かけて行こうとする。出発する時のグラニーの様子は、

When Granny came out (still in the black silk and the bonnet as if she had slept in them, passed the night standing rigidly erect with her hand on the key which

she had produced from we knew not where and locked her door for the first time Ringo and I knew of) with her shawl over her shoulders and carrying her parasol and the musket from the pegs over the mantel.¹⁾

といったように、いかにも勇敢そうな感じがする。また、途中で男たちに騾馬を盗まれた時のグラニーの闘いぶりは、

... Granny standing up in the wagon and beating the five men about their heads and shoulders with the umbrella while they unfastened the traces and cut the harness off the mules with pocket knives. They didn't say a word; they didn't even look at Granny while she was hitting them; they just took the mules out of the wagon, and then the two mules and the five men disappeared together in another cloud of dust ...²⁾

という具合で、グラニーはまさに男まさりの強さで闘っているのである。「急襲」(“Raid”)では、盗まれた銀器の大箱、黒ん坊、騾馬をとり返すために、12才のベイヤードとリンゴの二人だけを連れて、北軍の陣営に乗り込んでいく。この時、伝令兵がグラニーの言ったことを聞きがちがえたために、グラニーたちはずい分たくさんの銀器の大箱、黒ん坊、騾馬を手に入れて帰ることになる。「反撃」(“Riposte in Tertio”)では、リンゴが手に入れてきた「テネシー州合衆国軍管区」という軍隊の印が押してある便せんと、軍用のペンとインクを使って、にせの書類を作成し、たくさんの騾馬を北軍から奪い取り、それを北軍に売りつけて収益をあげる。グラニーがこのようなことをするのは、自分のためではなく、貧しい人々にその収益を分けてやるためである。

このように見てみると、グラニーは何ものにも負けない、勇気ある、強い人物であるように思われる。たしかに、いざという時に、人は誰でもとても大きな力を発揮するものであるから、グラニーはこのように強い態度で立ち向かうことができたのかもしれないが、ただそれだけではない。彼女の強さの奥には、南部の伝統的な考え方があり、南部社会はまだその考え方に従って行動できるような状況であったが故に、彼女は強い態度をとることができたのである。彼女は、Thomas Daniel Young が指摘しているように、“southern lady whose actions are severely limited by the restrictive code of the society to which she belongs”³⁾であるといえる。それを感じさせる場面はいくつかあるが、最初にあげられるのは「待伏せ」の一場面である。北軍の大佐は、グラニーが家に子供はいないと嘘をつき、スカートの下にベイヤードとリンゴを隠していることに気づいていながらも、二人をスカートの下から引きずり出したりはしない。自分にも三人の息子がいることを話し、グラニーに同情さえ示す大佐は、女性を傷つけたりしない紳士である。グラニーのとった態度に対して、大佐が南部の伝統的な考え方を守るようなやり方で対応したからこそ、ベイヤードとリンゴは助かったのである。次に「退却」の中で、メンフィスへ出かけて行くグラニーを、南軍の将校が止めようとする、グラニーは “My experience with Yankees has evidently been different from yours. I have no reason to believe that their officers—I suppose they still have officers among them—will bother a woman and two children.”⁴⁾ と言って、「男性は女性を傷つけるものではない」という南部の伝統的な考え方を信じていることを明らかにする。また「反撃」において、アブ・スノープス(Ab Snopes)に話をもちかけられ、グランビー(Grumby)一味の馬を手に入れるために出かけて行くグラニーを、ベイヤードが止めようすると、グラニーは “... And now I am taking no risk; I am a woman. Even Yankees do not harm old women. You and Ringo stay here until I call you.”⁵⁾

と言う。「待伏せ」から「反撃」に至る4つの短編の中に描かれるたくましいグラニーの行動は、すべてこの南部の伝統的な考え方に基盤があったのである。そして最後に、この考え方のために、グラニーは敗北することになる。アブ・スノープスがグランビー一味の馬をとりに行くように、グラニーに話をもちかける時、「南部の男が婦人に危害を加えるようなことはない」と言ってグラニーをおだてる。そのようにしてグランビーのところへ出かけて行ったグラニーは、皮肉なことに北部人ではなく、自分と同じ南部人の手で殺されてしまう。グランビーはグラニーと同じ南部人ではあったが、南部の伝統的な考え方を守る男ではなかった。すなわち、南北戦争という激動の時期を経験することによって、南部社会も変化してきたのであり、それに気づかなかつたために、グラニーは最終的に敗北することになったといえる。

次に勇気ある人物と考えられるのは、ベイヤードの父のサートリス大佐の妻になるドルシラ (Drusilla) である。彼女はグラニーの姪であり、サートリス大佐の義理の従姉妹にあたる。彼女はもともと男性的な性格をしているのであるが、「急襲」の中で、彼女はベイヤードに、“When you go back home and see Uncle John, ask him to let me come there and ride with his troop. Tell him I can ride, and maybe I can learn to shoot. Will you?”⁶⁾ と言って、サートリス大佐の連隊に参加したいと願い、軍装して大佐と終始行動を共にすることになる。「サートリス家における小戦闘」(“Skirmish at Sartoris”) で、南北戦争後ジェファソンに帰って来た後も、ドルシラは男やもめのサートリス大佐やその家族と共に暮らす。そんなことで世間から変な目で見られるようになり、遂にサートリス大佐と結婚せざるを得なくなるのであるが、ジェファソンの連邦保安官の選挙の日と結婚式の日が重なったため、サートリス大佐と二人で選挙の準備などやっているうちに、結婚式をするのを忘れてしまうといった具合である。

「美女桜の香り」の中には、ドルシラの男性的な姿の描写が出てくる。サートリス大佐がレッドモンド (Redmond) に殺されたという知らせを受けたベイヤードが、リンゴーと共にジェファソンに向かう途中で、家で待っているドルシラの姿を思い描く部分には次のようである。

... Drusilla would be waiting for me beneath all the festive glitter of chandeliers, in the yellow ball gown and the sprig of verbena in her hair, holding the two loaded pistols (I could see that too, who had had no presentiment; I could see her, in the formal brilliant room arranged formally for obsequy, not tall, not slender as a woman is but as a youth, a boy, is, motionless, in yellow, the face calm, almost bemused, the head simple and severe, ...⁷⁾

また、同じように男性的な姿のドルシラを描いた別の箇所には、

... and she had changed but little since—the same boy-hard body, the close implacable head with its savagely cropped hair which I had watched from the wagon above the tide of crazed singing niggers as we went down into the river—the body not slender as women are but as boys are slender. ... She was already running, the skirts she did not like to wear lifted almost to her knees, her legs beneath it running as boys run just as she rode like men ride.⁸⁾

というように、まさしく青年を思わせるドルシラの姿がはっきりと描かれている。こういった男性的な姿で、サートリス大佐と共に南北戦争の戦場で戦うドルシラであるが、彼女をそうさせるのは一体何なのであろうか。それは、結ばれることもないうちに、フィアンセを戦争で失った彼女が、男のように戦場で戦う勇気の中に生きがいを見出すからである。彼女がサートリス大佐の連隊に参加する決心をする理由は、「急襲」の中の、彼女とベイヤードの会話の場面に

はっきりとあらわれている。

Living used to be dull, you see. Stupid. You lived in the same house your father was born in, and your father's sons and daughters had the sons and daughters of the same Negro slaves to nurse and coddle; and then you grew up and you fell in love with your acceptable young man, and in time you would marry him, in your mother's wedding gown, perhaps, and with the same silver for presents she had received; and then you settled down forevermore while you got children to feed and bathe and dress until they grew up, too; and then you and your husband died quietly and were buried together maybe on a summer afternoon just before suppertime. Stupid, you see.⁹⁾

ドルシラはフィアンセを失った悲しみの中で、Cleanth Brooks も言っているように、“the whole of the traditional life of a woman”¹⁰⁾を捨てて戦場で戦う決心をするのである。上記の引用部分に続く箇所、彼女はベイヤードに“**But now you can see for yourself how it is; it's fine now; ... you don't have to worry about getting children to bathe and feed and change, because the young men can ride away and get killed in the fine battles; and you don't even have to sleep alone, you don't even have to sleep at all**”¹¹⁾と言う。確かにドルシラは勇気があるにはちがいないが、彼女を戦場で戦わせるのは、彼女の勇気というよりも、むしろフィアンセを失った悲しみであるといえる。このように考えてみると、ドルシラは勇気に生きがいを見出し、勇気ある行動をとりはするけれど、その勇気は少々ゆがめられた勇気のように感じられる。またこのことは、“**A dream is not a very safe thing to be near, ... if it stays alive long enough, somebody is going to be hurt. But if it's a good dream, it's worth it. There are not many dreams in the world, but there are a lot of human lives. And one human life or two dozen—**”¹²⁾と言って、人の生命より名誉を重んじる彼女の考え方や、ベイヤードがレッドモンドを殺すつもりがないことを感じた時、彼女がヒステリックに笑い始めることからもうかがえる。彼女の勇気は、人を殺すという violence を肯定する南部社会に特有の勇気である。

この作品の中には、このほかにも勇気を持った人々が何人かいると思われるが、北部に征服されない南部精神の中で育ちながら、その南部精神にも征服されない人間に成長していくベイヤードこそ、最も人間的で真に勇気ある人物であると思う。ベイヤードは、まだ少年の頃、グラニーの生き方の影響を受けて南部精神を身につける。グラニーがグランビーに殺された時は、「ヴァンデー」(“**Vendée**”)の中で、仇討ちのために、リンゴーとバックおじさん(Uncle Buck)と共にグランビーを追いかけて、彼を殺してその右手をグラニーの墓に供え、南部社会の要求に答える。「美女桜の香り」の中で、サートリス大佐がレッドモンドに殺された時、ベイヤードは大学で法律を学ぶ24才の青年になっている。下宿先のウィルキンズ教授(Professor Wilkins)の家で、父が殺されたという知らせを受けた彼は、少年の頃グランビーを殺した時のように仇討ちをしようとは思わない。彼は“**At least this will be my chance to find out if I am what I think I am or if I just hope; if I am going to do what I have taught myself is right or if I am just going to wish I were.**”¹³⁾と考え、父が殺されたからその相手を殺すというやり方はしないでおこうと思う。彼をこういう気持ちにさせたのは、Cleanth Brooks も指摘しているように、“**the psychic wound that Bayard has suffered in the killing of Grumby**”¹⁴⁾である。すなわち、南部の掟に従って仇討ちをした後にベイヤードが感じたのは、歓喜ではなく、空しさと罪の意識であったのである。だがサートリス大佐が殺された今は、ベイヤードこそサートリス家の代表で

あり、彼は何らかの形でレッドモンドに立ち向かい、南部社会の要求に答えなくてはならない。彼は南部社会の人々から臆病者であるとは思われたくない。それ故、ベイヤードは何の武器も持たないで、ドルシラが上着の襟にさしてくれた美女桜の香りにつつまれて、レッドモンドの事務所へ向かう。この美女桜は、ドルシラがいつも耳の上にさしていた花であり、その香りは“the only scent you could smell above the smell of horses and courage”¹⁵⁾であると彼女が言う花である。美女桜は勇気の象徴なのであり、ドルシラはベイヤードがレッドモンドを殺すことを期待して、勇気の象徴である美女桜を彼の上着の襟にさしたのである。

ところで、ジョージ・ワイアット(George Wyatt) やサートリス大佐の昔の部隊の連中が見守る中、美女桜の香りにつつまれて歩いていくベイヤードについて次のような描写がある。

It was almost noon now and I could smell nothing except the verbena in my coat, as if it had gathered all the sun, all the suspended fierce heat in which the equinox could not seem to occur and were distilling it so that I moved in a cloud of verbena as I might have moved in a cloud of smoke from a cigar.¹⁶⁾

ここに“equinox could not seem to occur”という表現があるが、“equinox”は、ベイヤードがレッドモンドの事務所へ武器を持たずに行くという行為の進展と関連させて、Faulknerがうまく使っている象徴の1つである。ウィルキンス教授の家を出る時から、ベイヤードは“the overdue equinox like a laboring delayed woman”¹⁷⁾に対して敏感になる。そして“equinox”が来るのを待ちこがれながら、レッドモンドのところへ向かう。“equinox”が来ないことについて Melvin Backman は次のように述べている。

The autumnal equinox is the harbinger of the season when the land may rest from its summer's labors and renew itself for another spring. That the equinox never occurs in “An Odor of Verbena” suggests that the South is not yet ready for renewal.¹⁸⁾

“equinox”は夏の暑さが終わって秋になる季節の変わり目であるが、まだ南部社会には violence という熱が充満していて、“equinox”が来ないが故に、violence を否定する新しい南部社会に生まれかわることができない。William E. Walker も述べているように、“Rebirth could not occur—the season was like a woman trying to give birth, in labor pains”¹⁹⁾であり、なかなか生まれない“equinox”を誕生させる産婆は、violence の熱の充満した南部社会の中で、何の武器も持たずにレッドモンドに立ち向かうベイヤードなのである。

このようにして、ベイヤードは、南部社会の要求に答えるために、そしてまた、彼独自の考えを実現するために、レッドモンドの事務所に向かう。ベイヤードがレッドモンドの事務所に着くと、レッドモンドは机の上に横にしたピストルを握って構えている。しかし、ベイヤードが素手で彼に向かって歩いていくと、彼はピストルを二度発射するが、ベイヤードからねらいをはずして撃ち、その後すぐに荷物も持たずに南行きの列車に乗って去って行き、二度とジェファソンの町へ帰って来ることはない。素手でレッドモンドに立ち向かい、殺されずに外に出て来たベイヤードに対して、南部社会を代表しているともいえるジョージ・ワイアットは、“Why not? You ain't done anything to be ashamed of. I wouldn't have done it that way, myself. I'd a shot at him once, anyway. But that's your way or you wouldn't have done it.”と言い、また続いて“Maybe you're right, maybe there has been enough killing in your family without—Come on.”²⁰⁾と言って、ベイヤードのやり方を認めてくれる。自分の思うとおりのことを成し遂げたベイヤードは感激の涙を流す。ベイヤードがレッドモンドの事務所へ行くこ

とを、ジェニー叔母さん(Aunt Jenny)が止めようとした時、彼が“I must live with myself, you see.”²¹⁾と言って、決意の変わらないことを表明したことからわかるように、彼はただ南部社会から臆病者だと思われないためにこのようなやり方をしたのではなく、violence を肯定する南部社会で育ち南部精神の影響を受けている自分自身に立ち向かい、自分自身に克ったのである。Hyatt H. Waggoner が言っているように、ベイヤードは“reject the South, the past, or the Southern past”せず、“modified a code to bring it into better relationship with living conditions”²²⁾したのであり、Cleath Brooks が言っているように、自分が“possesses the requisite courage”²³⁾していることを、ドルシラやジョージ・ワイアットやその他の南部社会の人々に対してのみでなく、自分自身に対して証明したと考えられる。また、Thomas Daniel Young が指摘しているとおり、このレッドモンドとの経験を通して、ベイヤードは“the nature of true courage”²⁴⁾を学んだのである。

ここで、ベイヤードと同じ考え方を持っていると思われるジェニー叔母さんについて、少しふれておきたい。彼女はベイヤードの父のサートリス大佐の妹である。彼女もドルシラと同じように、若い時に南北戦争で夫を失っているが、ドルシラのように戦場で男たちと一緒に戦うようなことはしない。彼女は、ベイヤードがレッドモンドの事務所へ出かけて行く日の前夜、ベイヤードにレッドモンドを殺すのをやめるように言う。

Now it was Aunt Jenny who said “Bayard” twice before I heard her. “You are not going to try to kill him. All right.”

“All right?” I said.

“Yes. All right. Don’t let it be Drusilla, a hysterical young woman. And don’t let it be him, Bayard, because he’s dead now. And don’t let it be George Wyatt and those others who will be waiting for you tomorrow morning. I know you are not afraid.”²⁵⁾

また、ベイヤードが出かけるのを見送る時には、“You see, I want to be thought well of”と言って出て行く彼に向かって、“Even if you spend the day hidden in the stable loft, I still do.”²⁶⁾と言う。そして、ベイヤードがレッドモンドを殺さなかったことをすでに知らされていたと思われる彼女は、帰ってきたベイヤードに向かって、喜びの様子で“So you had a perfectly splendid Saturday afternoon, didn’t you? Tell me about it.”²⁷⁾と言って、彼の顔を両手でしっかりと抱きしめ、感激と喜びの涙を流すのである。

以上のように考えてみると、グラニーとドルシラは確かにある意味では勇気ある強い人間であるが、いずれの場合も、独特の古さが残っている南部社会の中でしか通用しない勇気である。それに比べてベイヤードは、violence を肯定する南部社会で育ち、南部精神を受けつぎながらも、そういう自分自身にうち克って、violence を否定する新しい南部社会を生み出す第1歩をふみだしたという点で、もっと広い社会に通用する真の勇気を持っていると考えられる。また、ジェニー叔母さんも、violence を否定する新しい南部社会を築こうとしている点で、ベイヤードと同じように、広い社会に通用する真の勇気を持っているといえよう。

注

- 1) Faulkner, William: *The Unvanquished*, 48~49, Vintage Books (1966) This edition was reproduced photographically from the first edition (1938)
- 2) Ibid., 66
- 3) Young, Thomas Daniel: *The Past in the Present: A Thematic Study of Modern Southern Fiction*, 34, Louisiana State University Press (1981)
- 4) Faulkner, 64
- 5) Ibid., 174
- 6) Ibid., 115
- 7) Ibid., 252
- 8) Ibid., 257
- 9) Ibid., 114~115
- 10) Brooks, Cleanth: *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, 80, Yale University Press (1963)
- 11) Faulkner, 115
- 12) Ibid., 257
- 13) Ibid., 248
- 14) Brooks, Cleanth: *The Hidden God: Studies in Hemingway, Faulkner, Yeats, Eliot, and Warren*, 32, Yale University Press (1963)
- 15) Faulkner, 253
- 16) Ibid., 283
- 17) Ibid., 246
- 18) Backman, Melvin: *Faulkner: The Major Years*, 124, Indiana University Press (1966)
- 19) Walker, William E.: "The Unvanquished: The Restoration of Tradition," in *Reality and Myth: Essays in American Literature in Memory of Richard Croom Beatty*, ed. William E. Walker and Robert L. Welker, 285, Vanderbilt University Press (1964)
- 20) Faulkner, 289
- 21) Ibid., 276
- 22) Waggoner, Hyatt H.: *William Faulkner: From Jefferson to the World*, 171, University of Kentucky Press (1966)
- 23) Brooks, *The Hidden God*, 33
- 24) Young, 42
- 25) Faulkner, 276
- 26) Ibid., 280
- 27) Ibid., 292